

Special Need Education Research Center

SNERC通信

(第30号-2013年10月)

国立大学法人 筑波大学
特別支援教育研究センター
センター長：四日市 章
〒112-0012 東京都文京区大塚 3-29-1
TEL&FAX：03-3942-6923
<http://www.human.tsukuba.ac.jp/snerc/>
mail：snerc@human.tsukuba.ac.jp

「今後の特別支援教育におけるインクルーシブな ICT 環境の活用」

筑波大学特別支援教育研究センター 藤原 義博

本年度より当センターでは、本学附属特別支援学校と連携し、これまで各附属学校で開発されてきた教材・教具を障害特性を超えて広く活用してもらうための公開データベース化システムづくりに取り組んでいます。

ところで、現在、国立特別支援教育総合研究所では、平成 23 年度より、障がいのある子どもの教育へのアクセスを促進するためのデジタル教科書・教材及び ICT の活用に関する基礎調査・研究が行われています。また、特別支援学校では、ICT の活用による教育推進事業に取り組んでいます。iPad や iPod 等のタブレット端末を導入し、障がい特性や発達段階に応じたアプリの開発や障がいのある児童生徒の学習や経験を拡充するという、ICT 環境の効果的な教育活用に関する取り組みです。具体的には、児童生徒のタブレット端末への強い興味関心を教育効果に活かす試行錯誤や発語のない自閉症児のコミュニケーション支援等であり、iPad 等端末と特別支援教育アプリのコミュニケーション支援ツール（「ねえ聞いて」、「はなまるアプリ」、「たすくスケジュール」「トーキングエイドシンボル版・テキスト版」など）、歯みがき・手洗い・ラジオ体操アプリなどの活用です。

このように今後は、特別支援教育においても ICT 環境の教育活用が進展していくだろうと思われれます。そこで、9月のセンター・セミナーでは、その一環として、人間の能力を支援・拡張する人と機械機能の融合を目標とする人工知能研究をしておられる筑波大学サイバニック研究センターの鈴木健嗣先生をお招きし、人間とロボット・機械系の相互作用による、障がいのある子どもたちの活動の可能性を広げるための研究成果をお話いただきました。大変興味深いお話しで、今後の特別支援教育における ICT 環境活用の実証的成果を確認することができました。

センターで開発予定の公開データベースでは、今後のインクルーシブな特別支援教育の促進につながる ICT を含めた教材・教具の活用情報の公開・発信に向けて開発に努めたいと思います。皆様方のご意見・ご要望もよろしく願います。



■第16回センター主催セミナー 「サイバニクスと特別支援教育」

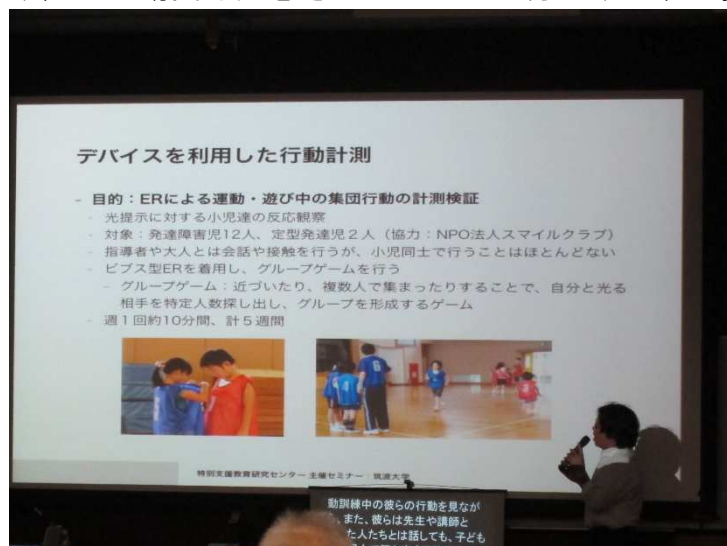
9月14日（土）に、筑波大学サイバニック研究センターの鈴木健嗣先生をお招きし、第16回センター主催セミナー「サイバニクスと特別支援教育」を下記のような趣旨のもと開催しました。

“筑波大学特別支援教育研究センターでは、附属特別支援学校5校、附属学校教育局と連携して、附属特別支援学校の有する優れた教材や指導法等の教育資産をデータベース化し、これを広く公開し、活用してもらうための連携事業を進めています。本セミナーはその一環として、これからの特別支援教育に強く望まれる ICT 技術の導入と、指導での効果的な活用に関する知見を得るため、この分野の第一人者である筑波大学・サイバニック研究センターの鈴木健嗣先生をお招きし、ICT やロボット技術の教育での活用についてのご講演や、参加者との意見交流の場を設定しました。



講演は“世界で初めての人支援ロボット”として昔の映画の一場面を引用され、人を支援するということについての問題提起から始まり、前半は“子どもや大人が着たり付けたりにして行動を測るデバイスについて”のお話、15分間の休憩をはさんだ後半は“コミュニケーションや物理的行動の支援について”のお話でした。内容は想像を超えて可能になっていることがいろいろと提示されて、最先端の科学技術の一端を知ることができるものだったように思います。

講演の中には“ソーシャル・イメージング”や“パーセプチュアル・クロッシング”等々の初めて耳にする用語が多く含まれていましたが、易しく解説を加えながらのお話であり、また動画も用意されていたので分かりやすく拝聴することができました。



いろいろな機器（ロボット、デバイス）を紹介される鈴木先生のお話の中に「ロボットやデバイスでやってきたのは、人の運動支援。運動の支援から心の支援までを考えてやってきた」「デバイスを使用して社会的交流の機会創出支援する」「人の意志を理解することが、我々が考えるサイエンスで最も大事なこと」「福祉工学とか障がい者支援という言葉ではなく、人の

意思を理解して支援する人支援技術と言っている」というようなことが含まれていたことは、特別支援教育に携わる我々にとってたいへん心強いことと思えました。

セミナー終了後に参加者から回収したアンケートにも、「学校現場で使えるようなヒントがたくさん得られた」「工学の分野がこんなに発達しているとは知らず、驚くことばかりだった」「人との関わりを促すヒントが得られた」「これからサイバニクスが特別支援教育の現場で存在感が増すように感じた」「現場で使用したいと感じる機材が多くなった」「当事者の意志が反映できる支援デバイスがこんなにあるとは思わなかった」等の記述が見られました。中には、「非常にすばらしい講演内容だったので、もっと宣伝した方が良かったのではないか」という記述もありましたが、50名ほどという参加者数は内容の質に比して少なく、残念に思いました。

■平成25年度 筑波大学免許法認定公開講座

筑波大学免許法認定公開講座は、平成16年の特別支援教育研究センター開設を期に人間系（障害科学域）、附属特別支援学校との連携のもと、実質上の企画運営を本センターが行ってきました。今年度7月29日（月）～8月9日（金）の12日間10講座を実施し、全国からのべ500名ほどの方が受講されました。



<2 欄 視覚障害の指導法 触って理解する>



<2 欄 聴覚障害の指導法>

本講座では情報保障として、パソコン要約筆記や点訳資料の配付等も行っており、今回は6講座で実施いたしました。人間系及び附属学校の先生方をはじめ、協力くださった皆様方には深く感謝申し上げます。

■現職教員研修生日記

本センターでは、高い専門性を持つ教員の養成を目的とし、一定の教育経験を持つ教員等を対象に研修生の受け入れをおこなっています。そこでは、筑波大学附属特別支援学校5校での実習と、本センター及び筑波大学大学院教育研究科特別支援教育専攻での講義・演習を組み合わせた長期研修プログラムを提供しています。

このコーナーでは、研修生の皆さんに日々頑張っていることなどを寄稿して頂きます。

北海道札幌養護学校 田野 大介

学生時代以来、10数年ぶりに始まる東京での一人暮らしに期待感と不安感が入り混じった4月当初、この筑波大学特別支援教育研究センターを訪れてから早半年の月日が過ぎようとしています。猛暑、異常気象と言われた季節も過ぎ、秋の訪れを感じながら、日々研修に励んでおります。

教職に就いてから10数年、毎日、目の前の子どもたちと向き合うことで精一杯であった私にとって、この現職教員研修はこれまでの自分の取り組みを振り返るとともに、研修生の立場で授業参観や研究会に参加でき、客観的に物事を見聞きすることができる貴重な学びの機会となっております。

また、センター教員の先生方の講義や附属特別支援学校における演習、筑波大学での授業聴講などを通して、障害種に応じた専門性を身につけることができ、日々、刺激を受けながら学び続けることの大切さを感じております。

最後になりましたが、全国から集まった同期の研修生をはじめ、多くの皆様方との出会いに感謝しながら、残り6ヶ月の研修生活を大切に過ごしていきたいと思っています。



千葉県立袖ヶ浦特別支援学校 佐久間智大

今年度、筑波大学特別支援教育研究センターでの現職教員研修生として、貴重な学びの機会をいただいたこと、センターや大学の先生方、学生さんたち、附属特別支援学校のみなさん、同期の研修生とたくさんの出会いの機会をいただいたことに、心より感謝申し上げます。また、安藤先生には、ご多忙にもかかわらず、肢体不自由教育について、いつも温かくご指導をいただき、深く感謝申し上げます。

この機会に、特に重複障害児童生徒の「実態把握」について、研修したいと考えていましたが、センターでの研修がスタートし、それ以前の自分自身の力不足を感じる毎日が続きました。学ぶべきことは無限にあることを痛感しながら、学べることのうれしさを感じ、自分の考えを深めたい、確かめたいという意欲にもつながりました。学校から離れ、これまでの自分の実践や学校を客観視できる貴重な機会にもなっています。充実した毎日は本当にあっという間に過ぎて、気づけば研修も折り返しを迎えようとしています。一回り大きく（見た目ではなく…）なって現場に戻れるよう、残された研修期間を苦しんだり、楽しんだりしたいと思います。今後ご指導よろしく願いいたします。

